

大友宗麟の実像



大友宗麟公像
(JR大分駅前)

第11回

宗麟がつなぐネットワーク

【大分市が「豊後府内」と呼ばれた戦国時代。この地に南蛮文化をいち早く取り入れ、国際文化都市として繁栄させた「大友宗麟公」をシリーズで紹介します。】

大友宗麟は、南蛮貿易を積極的に進めるとともにキリスト教の布教を許可しました。これにより、多くの宣教師が豊後府内(大分市)を拠点に日本各地で布教活動を行うこととなります。

その足跡は、今も市内各所に残っており、その一つが野津原地区の今市。江戸時代の参勤交代に使われ、肥後街道として熊本へと続くこの道ですが、それ以前から宣教師たちはここを頻繁に利用しています。当時、彼らが豊後から長崎へ向かうと、薩摩を回る海路は島津氏、肥前を通る長崎街道は龍造寺氏に阻まれていました。そこで、その間を縫うように九州の中央部、肥後から豊後に至る帯状に支配地域を広げていた大友氏の領域を往来。宗麟が保護したルートを利用したのです。



今市石畳(県指定史跡)

江戸時代の肥後街道の一部で、豊後鶴崎と肥後熊本を結ぶ歴史ある道。全長660mの道の中央部分に全面平石が敷き詰められ、今も往時の姿を残しています。

このルートは近年、研究者により「キリシタンベルト」と名付けられています。肥後からは有明海、島原半島を経由し、その先は長崎に通じていました。長崎からは大海原を渡ってヨーロッパまでつながり、府内からは瀬戸内海を通して泉州堺(大阪府堺市)、そして都(京都)まで延びていたといわれています。ここから、人だけでなくさまざまな物資や情報が行き交ったと考えられています。

日本を、そして世界を横断するネットワークを宗麟が意図したものであるなら、その類いまれなる広い見識には驚かされます。